

---

# 東北芸術工科大学 紀要

## BULLETIN OF TOHOKU UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

第31号 2024年3月

全学共通科目「美術史」の授業設計の検討

Consideration of Course Design for the General Education Subject "Art History"

黒木 健 | KUROKI Ken

# 全学共通科目「美術史」の授業設計の検討

## Consideration of Course Design for the General Education Subject "Art History"

黒木 健 | KUROKI Ken

This study is an examination of the design of a class on "Art History," a university-wide common course at the University. It is unique in that it targets students who are beginners in art history and that it improves students' interest in and willingness to learn art history through various efforts to overcome the disadvantages of remote classes due to the Corona Disaster. Specific initiatives include: 1. Developing classes based on themes rather than general history; 2. Introducing "appreciation through dialogue," in which art works related to the theme are viewed through dialogue, and combining this with lectures; 3. Setting nicknames for students so that they can participate in class safely while protecting their privacy; and 4. Even for students majoring in design or literature, the course was designed to include content that would deepen their knowledge of their own majors by finding connections to art history. As a result, more than 90% of the survey respondents were satisfied with many of the initiatives.

### Keywords:

美術史 初心者 授業設計 対話による美術鑑賞 リフレクションシート

Art History, Beginners, Lesson Design, Art Appreciation through Dialogue, Reflection Sheets

## 1.はじめに

本研究は、本学の全学共通科目である「美術史」の授業設計の検討である。

特徴は、美術史の初心者の学生を対象としていること、また、コロナ禍の影響によるリモート授業においてニックネームを設定して対話を活用した美術鑑賞と講義をセットにしたこと、テーマに基づく西洋と日本の美術史の扱いなどである。

「美術史の初心者」については、「全くの初学者」から「初心者としての意識が強い」などの幅があることが予想されるが、本研究においては一括して美術史に関して「初心者」と表記する。

本来、授業設計について述べる場合、受講生の評価に関わるルーブリックの活用や具体的な判定状況の説明などを含めなければならないが、紙面の都合により稿を改めて報告したい。

## 2.研究の目的

この授業を実施していくにあたり、以下の4つの事情をクリアし、美術史の初心者である受講生が「美術史」の学びの入口として本授業に満足感を得るように設計することが本研究の目的である。

その目的が達成できたかを確認する方法は、期の終了時に実施するアンケート結果を活用して判定する。

### (1)美術史の初心者を対象

筆者が本授業を2021年度から担当するにあたって、依頼されたのは、カリキュラムは美術史の初心者を対象とする

ことであった。

芸術系大学に入学する学生に、美術史の初心者がいることは何ら不思議なことではない。高等学校では必修教科科として「芸術I」が設定されており、その中に「音楽I」、「美術I」、「書道I」、「工芸I」の4科目が構成されている。その中から生徒は1科目を選択することになるが、各高等学校においてはその規模の事由などから、必ずしも4科目全てを開設しなくともよいという運用がある。そのため「美術I」が開設されない科目に含まれてしまい、生徒は美術の授業を選択したくてもできないという現象が起きてしまうのである。

### (2) リモート授業による実施

新型コロナウイルス禍にあって、2020年度よりZoomなどを活用したリモート授業が本学でも行われた。スタート時は授業を実施する側も受講する側も多少の混乱があったが、工夫や経験によって乗り越えてきた。

教育の実践は古代ギリシアの時代より有形・無形の教育資源を活用して「対面」を基盤に行われてきた。それが授ける側、受け取る側の息遣いが感じられないリモート授業になったのである。

しかしデメリットばかりではない。「その場」に行かなくとも授業を受けることが可能になったことや、状況によっては「その時間」でなくとも授業が行われるようになったことが挙げられる。

### (3) 多様な学年と専攻の混在

初心者とはいえ必ずしも1年生が選択するとは限らない。様々な理由で上級生が履修してくる可能性もある。よって、美術史に関するレディネスが多様となる。

また、美術史だということだけで芸術学部の美術科、文化財保存修復学科、歴史遺産学科の学生だけが選択するとは限らない。文芸学科の学生が希望することも考えられるし、デザイン工学部の各学科の学生ということもあるだろう。しかし、初心者やデザイン系の学生が対象といっても芸術系大学としての授業を実施する必要がある。

### (4) 西洋美術史と日本美術史

本授業が扱う美術史の範囲は「西洋」と「日本」である。筆者自身の経験や他の大学のカリキュラムを参照すると、それぞれが独立していることが多いように感じるが、本授業では両者を合わせた状態で15回という限られた回数の中で実施しなければならない。

## 3. 先行研究

藤原逸樹が大学の共通科目における美術史の授業設計を検討した成果を報告している<sup>1</sup>。

藤原はこの論文で、美術史に関する共通教育科目を初めて担当するにあたり、学生が授業に意欲をもって出席し、授業に満足するにはどう授業設計したらよいかを考える中で、学生からの毎回の授業評価(アンケート)を活用したという内容である。そのアンケートは、アメリカの教育工学者Kellerが提唱しているARCS動機づけモデル(Attention(注意)、Relevance(関連性)、Confidence(自信)、Satisfaction(満足感))に基づき、その理由の自由記述も判断資源としている。

筆者は藤原の学生の声を授業改善の資源としている点に深く共感する。授業者が「自分がしたつもり」にならず謙虚な態度で授業に関わろうとしているからである。また、藤原は学習意欲を喚起しながら主体的な学びを創造する以下の4つの授業方略を設定している。

「課題型授業の工夫(予習課題)」

「参加型授業の工夫(調べ学習の発表)」

「発展的学習の工夫(美術館レポート)」

「評価の工夫(中間試験、期末試験)」

「教材の工夫1(作家、作品の選定とその資料づくり)」

「教材の工夫2(ワークシート)」

教育研究者の奥村高明が「教育の生態系と資源」<sup>2</sup>で述べているように、授業は様々な資源によって支えられ成立している。これらの資源を活用しながらも藤原(2013)が「これらは相互に関連するもの」<sup>3</sup>と述べているように、可能な限り複合的に関係性をもたせ学習者の学びを確保していくことは重要であると考えられる。

美術史の授業を展開する上で、多様な方略を試み、成果を挙げている点で、高等学校の芸術科教諭である岩佐まゆみの「高等学校専門学科美術科における主体的・対話的で深い学びを促す美術史学習モデルの開発」<sup>4</sup>が貴重である。具体的な方略としては「対話による意味生成的な美術鑑賞」<sup>5</sup>および「思考ツール」や「知識構成型ジグソー法」を活用している。また、生徒の学習状況を把握するために「授業アンケート」の他に「ワークシート」や「定期考査」を活用している点は藤原(2013)の実践と重なるところがある。

「対話による意味生成的な美術鑑賞」は、一般的に「対

話による鑑賞」と略されている。筆者が高等学校で美術教諭であった時期にこの鑑賞方法を実践し、その成果を確認している。

先行研究を踏まえて本授業を検討するに際して、藤原(2013)の研究はコロナ禍以前の環境で行われたものであること、また、西洋美術史のみを扱う授業であることから、授業方略に関しては本研究において参考にはできない。また、岩佐(2020)の実践研究についても異なる校種、コロナ禍以前のカリキュラムであることから同様である。しかし、ワークシートの活用や「対話による鑑賞」は、オンライン授業であっても受講生の学びを支える上で大いに参考になると考えた。

## 4.研究の対象

### 1 対象科目

「美術史」(全学共通科目)

### 2 授業期間

2023年4月～7月(前期授業)

### 3 対象者

クラス13(73名)、

芸術学部:文化財保存修復学科(3名)、歴史遺産学科(1名)、美術科日本画コース(9名)、美術科洋画コース(6名)、美術科版画コース(4名)、美術科彫刻コース(3名)、美術科工芸コース(4名)、美術科テキスタイルコース(4名)、美術科総合美術コース(5名)、文芸学科(4名)  
デザイン工学部:プロダクトデザイン学科(10名)、建築・環境デザイン学科(3名)、グラフィックデザイン学科(7名)、映像学科(6名)、企画構想学科(3名)、コミュニティデザイン学科(1名)

クラス14(59名)

芸術学部:文化財保存修復学科(1名)、歴史遺産学科(2名)、美術科日本画コース(3名)、美術科洋画コース(9名)、美術科版画コース(4名)、美術科彫刻コース(1名)、美術科工芸コース(4名)、美術科テキスタイルコース(2名)、美術科総合美術コース(7名)、文芸学科(2名)  
デザイン工学部:プロダクトデザイン学科(7名)、建築・環境デザイン学科(2名)、グラフィックデザイン学科(9名)、映像学科(4名)、企画構想学科(1名)、コミュニティデザイン学科(1名)

4 科目の目的:(シラバスより)西洋、東洋を通して、美術の成り立ちやその歴史的流れを概観し、芸術やデザインを学ぶ基盤となる基本事項を幅広く理解することを目的とします。

5 授業概要:(シラバスより)専攻分野の内容理解につながるようにテーマを設定し、美術作品の鑑賞(対話式)と史実に関する講義を通して、芸術や美術、アートやデザインとはどのようなものなのかの理解を深めていきます。

## 5.研究の方法

本稿2の(1)～(4)の課題を解決する手立てとして、以下の6項目を実践の柱として設定した。留意したことは、可能な限り受講生の中学校や高等学校での学習経験を踏まえることである。特に中学校における歴史や美術の授業の他、日常の学校生活経験は大切にしたいと考えた。

### (1)テーマ設定による授業展開

限られた授業回数と授業時間で、効率的かつ効果的な授業を展開するために、各授業に「テーマ」を設定して実施することを試みる。理由は、世界史や日本史を年代順に学んできたという経験が多いことから、受講生に「テーマ」に基づき学ぶという新しい感覚を得てほしいと思ったこと、また、「テーマ」を設定することで、「西洋」と「日本」の類似事項を横断しやすくなることを期待した。

### (2)「対話による鑑賞」による授業導入

岩佐(2020)の実践研究において着目した「対話による鑑賞」が主に行われる環境は、学校の授業や美術館のギャラリートークである。そこでは「対面」での実施が通例である。そして鑑賞活動は「発言した人の発言内容」によって進められていく。しかし、作品を前に思考しているのは発言した人だけではない。発言はせずとも心の中に様々な言葉が留められていたはずである。そしてその内容は声を出した人のそれと優劣はないはずである。

Zoomを活用したりリモート授業がその問題を解決してくれると考えた。Zoomのチャット欄が発言をフラットに並べてくれるからである。発言のタイミングの差はあっても、チャット欄に打ち込んでさえくれれば等しく発言内容を見ることができ、鑑賞の展開が劇的に変わるはずである。

### (3)ニックネームの設定

Zoomにおける問題点はプライバシーの扱いである。デ

フォルトでは学籍番号や氏名が画面上に表示される。学生の言葉を借りるならば、それにより「身バレ」が起こる。専攻授業で互いの顔も名前も分かる間柄ならよいが、学内であっても不特定多数の学生が受講する「全学共通科目」にあっては、内向型の学生などは発言を躊躇してしまうことが予想された。

そこで、ニックネームの設定を試みた。自身が設定したニックネームを使うことで「身バレ」なく発言できるし、ニックネームの効果で場の雰囲気や和みも予感できる。具体的には平仮名またはカタカナの4文字か5文字の希望ニックネームを授業者に送信し、重複がないか確認した後に確定するというものである。

#### (4) リフレクションシートの設定

授業時間外における自学の促進ツールとして、リフレクション(ふり返りシート)の設定を試みた。内容は「1.対話による鑑賞」「2.授業テーマに関すること」「3.授業内容における疑問点」「4.授業への要望や感想など」によって構成している。授業者が作成した1時間前後で記入できる分量のテンプレートに、授業終了後5日以内に提出することとした。

#### (5) 美術史と専攻分野との関連

美術史を身近な学びと感じてもらうために、例えば「アート」と「デザイン」など、本学の専攻分野と意図的に結びつけるトピックを含めることにした。受講生にとって距離感があるであろう美術史の存在が、自身の専攻と関連があることによって、興味や関心が生まれることを期待した。

#### (5) 教科書の吟味

当初は西洋美術史と日本美術史それぞれの平易なテキストの使用を検討した。図版の数や色、価格の点で該当するものを探す過程で、西洋と日本の各美術史が一冊にまとめられ、かつ図版の色や見やすさなどが満足できる『改訂版 西洋・日本美術史の基本(美術検定1・2・3級公式テキスト)』<sup>6</sup>に出会った。美術検定3級も対象としていることから、初心者も無理なく使用できることが期待された。岩佐(2020)の授業においても同書が使用されている。

## 6. 実践

美術史に関連する書籍において、通史ではなくテーマに基づき構成されているものがある。それらを見ていると、同様のテーマが設定されていることを散見する。「裸体」は特

に多いと感じる。また、「秘密」や「謎」といった読者の関心を引き付けるようなタイトルを付けた書籍も多いと感じる。さらに最近の特徴としては、ビジネスや予測困難な社会との関連で美術鑑賞の必要性を謳うタイトルを含める書籍も多いと感じる。

これらの実態も参考にしながら、各授業にテーマを割り振り、中間の時期に「比較鑑賞」、期末時には自分が決めたテーマに基づく「オリジナル企画展提案」の創作課題を設定して全体を構成した。その内容については紙面と著作権の都合により割愛する。

### (1) 第1回授業「ガイダンス」

#### 1) 授業内容のコンセンサス

授業を実施するにあたり、受講を希望する学生と授業内容についてコンセンサスを図ることが重要であると考えている。特に評価に関わることについて、学生が後から知ることは避けなければならない。義務教育や高等学校の「指導と評価の一体化」が参考になる。

初心者を対象としたカリキュラムであること、授業の目的と目標、毎時の授業の流れ、出欠の確認方法、教科書の購入、評価の出し方などを提示して質問を受け付けた。

#### 2) 「対話による鑑賞」の体験



図1: アンドリュー・ワイエス作「クリスティーナの世界」<sup>7</sup>

#### 1 授業者からの初発問「何が見えましたか?」

履修者は図1の作品を1分間見た後、チャット欄に全体公開で打ち込む。

以下は受講生が打ち込んだ内容からの抜粋である。  
女性、家、小屋、草原、はしご、曇り空、乱れた髪、  
半袖、地平線、地面の色が違う、華奢な腕、骨ばった指

#### 2 次の問い「見えたものから何を感じますか?」

受講生は作品を1分間見た後、チャット欄に全体公開で打ち込む。

以下は受講生が打ち込んだ内容からの抜粋である。

- ・全体的に彩度が低いことから、重い雰囲気
- ・痩せた女性の姿から物悲しさや不安を感じる
- ・(草が)明るいところが過去の名残惜しさ
- ・女性に強い光が当たっていることから、希望や強い意志を感じる。

### 3 体験後の感想より

- ・それぞれ感じ方が違うっておもしろい。
- ・対話が進むと誰かの発言で絵の感じ方が変化して  
いって不思議というかおもしろい!

## (2) 第2回授業「アートとデザインの視点で見る美術史」

### 1) 対話による鑑賞



図2:フラ・アンジェリコ「受胎告知」<sup>8)</sup>

#### 1 図2の作品について「何が見えましたか?」

(受講生がチャット欄に打ち込んだ内容より抜粋)

二人の女性、柱、木、草、花、腕組み、ピンクの服、青い服、小さい窓、右側の女性は羽が生えている など

#### 2 「見えたものから何を感じましたか?」

(受講生がチャット欄に打ち込んだ内容より抜粋)

- ・二人ともお腹が痛い?
- ・目線が合っていないように感じる。
- ・右側の青い服の女性は驚いているのかも。

### 3 その他の作家による「受胎告知」作品の紹介

#### 2) 講義「アートとデザイン」

- ・中学校、高校時代の美術の授業内容に基づく「アート」と「デザイン」について
- ・「アート」は自由な自己表現?
- ・「デザイン」はレタリングとポスター制作?
- ・識字率の低い時代における宗教画の役割
- ・依頼主からの発注による作品制作
- ・これらのことを考えると、宗教画を「アート(自由な自己

表現)」として見るだけでなく、情報伝達機能に基づく「デザイン」として見ると理解しやすいのではないだろうか。(授業者の提案として)

- ・もちろん全てを「デザイン」として理解するのではなく、「美しさに感動する」という面もあってもいい。
- ・日本における「屏風」や「掛け軸」、「襖」なども「アート」と「デザイン」の視点で見てみよう。
- ・クリムト作品へのマックス・リーパーマンの指摘

## (3) 第3回授業「材料や素材の視点で見る美術史」

### 1) 対話による鑑賞



図3:アンディ・ウォーホル「キャンベルスープ缶」<sup>9)</sup>

#### 1 図3の作品について「何が見えましたか?」

(受講生がチャット欄に打ち込んだ内容より抜粋)

缶、32個のスープ缶、同じ柄の缶、額縁、額縁の影、均等に並んでいる、色彩に差がある、全部微妙に違う

#### 2 見えたものから何を感じましたか?

(受講生がチャット欄に打ち込んだ内容より抜粋)

- ・間違い探し? 試されている?
- ・スーパーの陳列棚
- ・作者が好きなのかも
- ・コピー機で刷ったみたい
- ・教室で生徒を教卓から見ている先生の景色
- ・学校教育の多様性のなさの揶揄
- ・就活生が並んでいるみたいでなんか怖いな
- ・缶を開けないと本当の味が分からないメタファー

### 2) 講義「材料や素材(粗から細への歴史)」

- ・絵の具=顔料+展色材
- ・フレスコ(水)、テンペラ(卵)、水彩(アラビアゴム)、日本画(膠)、油絵の具(乾性油など)、アクリル絵の具(アクリルエマルジョン)の紹介
- ・時代とともに顔料が小片(モザイク画)から粉になり、工業の進歩と共に質のよいものへと向上した。

- ・画家が工房において顔料をすり潰して展色材と混ぜていたルネサンス期から後に(フェルメールを主人公とした映画の一部を視聴)<sup>10</sup>、工業技術の発達によりチューブ入りの絵の具が製品化されると、屋外で描画することが可能となり印象派の発展に寄与した。
- ・アンディ・ウォーホルが使用したシルクスクリーンやその後に発達するインクジェットプリンターなどではさらに高品位なインクが求められるようになった。現代ではモニターなどの画面上で色が輝きを放っている。

#### (4) 第4回授業「革命や戦争の視点で見る美術史」

##### 1) 対話による鑑賞



図4:ジャン＝フランソワ・ミレー作「晩鐘」<sup>11</sup>

授業開始時に「晩鐘」と「落ち穂拾い」のどちらを鑑賞したいか受講生に選択させているが、例年どのクラスも「晩鐘」を選んでいる。



図5:ジャン＝フランソワ・ミレー作「落ち穂拾い」<sup>12</sup>

##### 1 図4について「何が見えましたか?」

(受講生がチャット欄に打ち込んだ内容より抜粋)

男女、荷車、祈る女性、夕焼け、向こうに教会、カゴ、左から光、鋤、雲、空を飛ぶ鳥たち、地平線

##### 2 見えたものから何を感じましたか?

(受講生がチャット欄に打ち込んだ内容より抜粋)

- ・不穏な空気
- ・感謝や神聖な感じ
- ・習慣のように感じる
- ・逆光であることがなんか不穏な感じ
- ・右側の女性には光が当たっているので希望がある感じがする

#### 3 他の画家への影響

- ・サルバドール・ダリ

#### 2) 講義「産業革命と農村風景／戦争と美術」

- ・産業革命による都市と農村(風景画への影響)
- ・産業革命による貧富の差
- ・農民(労働階級)とブルジョワ階級
- ・ナポレオン三世によるミレー作品の政治的利用
- ・第一次世界大戦の影響によるダダイズムの発生
- ・第二次世界大戦と美術

#### (5) 第5回授業「裸体の美術史」

##### 1) 対話による鑑賞



図6:エドゥアール・マネ 「草上の昼食」<sup>13</sup>

##### 1 図6について「何が見えましたか?」

(受講生がチャット欄に打ち込んだ内容より抜粋)

森、船、裸の女の人、かご、男性が二人、脱ぎ捨てられた服、かごから出たパン、ボート、ステッキ、ビン

##### 2 見えたものから何を感じましたか?

(受講生がチャット欄に打ち込んだ内容より抜粋)

- ・神話っぽくなくて俗っぽい
- ・談笑している
- ・ピクニック
- ・4人の視線がばらばら
- ・お互いが実は見えていないのではないか
- ・この絵を見ている自分が見られているみたいだ。
- ・裸の美しさを強調するような光の当て方をしている。

##### 3 登場人物の「視線」に関して

- ・福田美蘭の諸作品(「帽子をかぶった男性から見た草上の二人」など)の紹介

##### 2) 講義「ヌードとネイキッド」

- ・ティツィアーノ(またはジョルジョーネ)の「田園の合奏」

- とマルカントニオ・ライモンディ「パリスの審判」との関連
- ・ケネス・クラークによる「裸体像(ヌード)」と「はだか(ネイキッド)」
- ・古代ギリシアにおける神の姿(人間と同じような姿、同じような感情をもつ)
- ・神話や伝承における「見えないものたち」に形と色を与えて「見える化」してきた文化
- ・魂(anima)とanimism、animation

## (6) 第6回授業「比較鑑賞①」

### 1) 対話による鑑賞

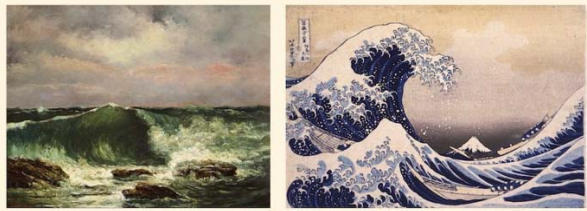


図7:左:ギュスターヴ・クールベ「The Wave」<sup>14</sup>、図8:右:葛飾北斎「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」<sup>15</sup>

#### 1 図7について「何が見えましたか?」

(受講生がチャット欄に打ち込んだ内容より抜粋)

波、海、曇り空、岩、鳥、奥に陸地?、緑色の波

#### 2 図7について「見えたものから何を感じますか?」

(受講生がチャット欄に打ち込んだ内容より抜粋)

荒々しさ、寒そう、迫ってくる恐怖、不吉な感じ、穏やかな感じではない、水深が深そう、自然の雄大さ

#### 3 図8について「何が見えましたか?」

(受講生がチャット欄に打ち込んだ内容より抜粋)

富士山、船、人が乗っている船、入道雲、左上に文字、背景をよく見ると雲、3艘の船、

#### 4 図8について「見えたものから何を感じますか?」

(受講生がチャット欄に打ち込んだ内容より抜粋)

ダイナミックだ、勢いを感じる、荒れた時は実際これくらい荒れる(元神奈川県民)、ポジティブなイメージ、勇ましい、荒々しいけれど怖い感じはしない、生きているような波、

#### 5 「左右の作品を比較して見えてきたこと」

(受講生がチャット欄に打ち込んだ内容より抜粋)

輪郭があるかないか、西洋の方が写實的、日本の方が大げさな雰囲気がある、自然に対する意識が違いそう、左側は岸から見て描いていそうで、右側は海原の中から見たような構図だ、右は演出がある気がする、西洋は自然には勝てない気がするけど、日本の方は自然も味方につけてそうな考え方が気がする、

## 2) 自身で作成する課題「比較鑑賞」の説明

- ・2点のうちどちらか一方は教科書に掲載されている作品とする。
- ・提出された「比較鑑賞」は、履修者全員で相互評価し、その中から注目した「比較鑑賞」1点を選び、ワークシートに鑑賞活動の内容を記入して提出する。

### (7) 第7回授業「比較鑑賞②」

提出作品を共有し、授業時間内で「比較鑑賞」を実施した。

### (8) 第8回授業「遠近法的美術史」

#### 1) 対話による鑑賞



図9:ジョルジュ・デ・キリコ「通りの神秘と憂愁」<sup>16</sup>

#### 1 図9について「何が見えましたか?」

(受講生がチャット欄に打ち込んだ内容より抜粋)

影、女の子、車輪、白い建物、荷車、旗、左下に二本線、朝焼け、西日、早朝、風が吹いている、日差しが強い

#### 2 見えたものから何を感じましたか?

(受講生がチャット欄に打ち込んだ内容より抜粋)

- ・現実味がない
- ・パースが狂っていて落ち着かない
- ・夢の中みたい
- ・体調が悪い時の夢に出てきそう
- ・植物とかが一切見られない。
- ・奥の人影によって不安な気持ちになる
- ・監視されている感じ
- ・建物の輪郭などの遠近がバラバラで不安定な感じ

### 2) 講義「遠近法」

- ・形而上絵画(メタフィジカ)について
- ・シュルレアリスムとの関係
- ・キリコが滞在したフェラーラの街の風景



- ・アニメ映画(ルパン三世:「ルパン対複製人間」)で描かれた情景
- ・「8種の遠近法」(MAU造形ファイル)<sup>17</sup>
- ・シュメール文明における重畳遠近法
- ・アルブレヒト・デューラーの透視図作成装置
- ・美術表現における遠近法とテレビ(ビデオ)ゲームの遠近法(空間表現)との相似

(9) 第9回授業「美術が美術を否定した美術史」

1) 対話による鑑賞



図10:マルセル・デュシャン「Fountain」<sup>18</sup>

1 図10について「何が見えましたか?」

(受講生がチャット欄に打ち込んだ内容より抜粋)

なぜ?、ひんやりと冷たい、便器にサインというのに違和感、

2 見えたものから何を感じましたか?

(受講生がチャット欄に打ち込んだ内容より抜粋)

- ・これが置いてあっても長い時間は鑑賞しなさそう
- ・キャンベススープの缶に近い何かを感じる
- ・サインがあると美術作品に見え出す
- ・ぱっと見、我々でもできそうな単純な物に見える

2) 講義「レディ・メイド作品」

- ・マルセル・デュシャン
- ・「選ぶ」という行為
- ・「タイトル」をつけること
- ・ダダとオブジェ
- ・ポップアート、コンセプチュアルへの流れ

3) 番組視聴と「判決文」の作成

視聴番組「宣誓」(1992年フジテレビ)より「カウンティング」(ジョナサン・ボロフスキー)

記録されたYoutubeにアクセスし、視聴した上で概念芸術を認めるか認めないかの「結論」を冒頭に記し、その後に「根拠」を述べる「判決文」形式にまとめて提出する。



図11:フジテレビ'(1992)「宣誓」の画面映像

(10) 第10回授業「工芸とデザインの境界線」

1) 対話による鑑賞



図12:展覧会図録「工芸とデザインの境目」<sup>19</sup>

1 「工芸とはどのような特徴がありますか?」

2 「プロダクトデザインの特徴は?」

(受講生がチャット欄に打ち込んだ内容を筆者が授業スライドに転記)

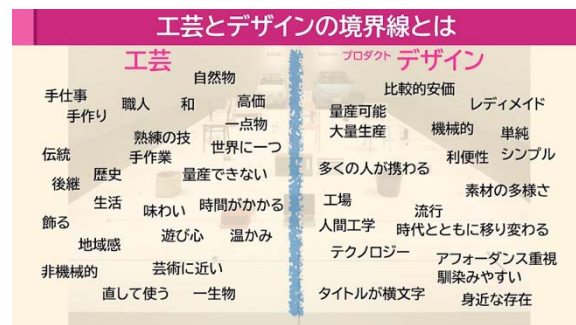


図13:クラス11による工芸とプロダクトデザインの特徴(筆者作成)

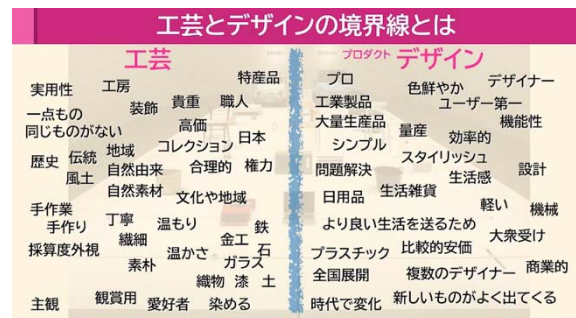


図14:クラス12による工芸とプロダクトデザインの特徴(筆者作成)

## 2) 講義「工芸とプロダクトデザイン」

- ・ 中学校学習指導要領、高等学校学習指導要領、東北芸術工科大学における「工芸」と「デザイン」の位置関係の相違
- ・ 高等芸術科(工芸)の教科書における掲載写真の紹介

## (11) 第11回授業「メディアの美術史」

### 1) 対話による鑑賞



図15:ヤン・ファン・エイク「アルノルフィーニ夫妻の肖像」<sup>20</sup>

#### 1 図15について「何が見えましたか?」

(受講生がチャット欄に打ち込んだ内容より抜粋)

シャンデリア、犬、窓辺に果物、妊婦さん、脱げたサンダル、赤いベッド、丸い鏡、窓、数珠?

#### 2 見えたものから何を感じましたか?

(受講生がチャット欄に打ち込んだ内容より抜粋)

- ・ 何かの儀式
- ・ 手相を見ている。
- ・ 無事に生まれてくるように安産のお祈り
- ・ 記念の写真撮影をしているように感じる
- ・ 結婚写真のような
- ・ 神聖な感じがする

## 2) 講義「メディアの美術史」

- ・ 油彩画の歴史
- ・ 図像学(イコノグラフィ)と図像解釈学(イコノロジー)、それに対する批判
- ・ 写真やビデオが無かった時代における美術作品の「情報の記録」や「情報の伝達」の機能
- ・ 「メディア」(複数形):記憶媒体、情報伝達媒体
- ・ 「メディウム」(単数形):媒体、展色剤
- ・ 「メディア」の視点による浮世絵(美人画、役者絵、名

所絵、武将絵、戯画・風刺画)の役割

- ・ 浮世絵と現代のメディアとの関係
- ・ 学校教育やマスメディアにおける「アートは自由な自己表現」「芸術は爆発だ!」の影響

## (12) 第12回授業「抽象作品の美術史」

### 1) 対話による鑑賞

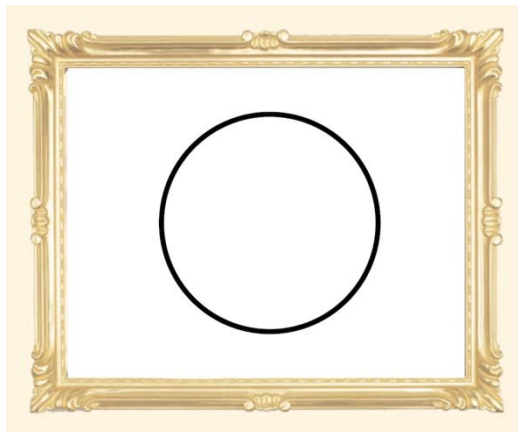


図16:「円」(筆者作)

#### 1 図16について「何が表されていると思いますか?」

○	お皿	○	目	○
円	横から見たパイプ	地球	星	無限
ただの丸	地球	顔の輪郭	宇宙	完璧
円形	通りぬけフープ	雪玉	世界	可能性
まる	滑り台の入り口	トンネル	異世界の扉	緊張感
正円				
地図記号				

図17:受講生の発言に基づく「円の分類」(筆者作)

図17は、抽象作品の見え方や感じ方の3分類(①そのまま、②例えや置き換え、③イメージ)<sup>21</sup>に基づき、受講生がチャット欄に記入したテキストを筆者が授業スライドに打ち直したもの。

## 2) 講義「抽象作品の見方、感じ方」

- ・ 創作プロセスに基づく3分類(①具象のシンプル化、②作者のイメージ表出、③偶然)<sup>22</sup>
- ・ P.モンドリアンの「赤い木」「灰色の木」「花咲くリンゴの木」に見られる「具象のシンプル化」プロセス
- ・ 何かを表すために使われてきた形や色、そこからの独立性(抽象美術作品)
- ・ 額縁と台座の役割、および現代におけるそれらの消失
- ・ 筆者撮影のニューヨーク近代美術館、ポンピドゥー美

術館、国立近代美術館(パリゾルジュ・ボンピドゥー国立芸術文化センター内)のモンドリアン、ジャスパー・ジョーンズ、ポロック、マーク・ロスコなどの接写写真の紹介

### (13) 第13回授業「日本が影響を与えた美術史(ジャポニズム)」

#### 1) 対話による鑑賞



図18:歌川広重「大橋あたけの夕立」<sup>23</sup>

#### 1 図18について「何が見えましたか?」

(受講生がチャット欄に打ち込んだ内容より抜粋)

雨、木の橋、激しい雨、曇り空、人、筏、御札みたいなやつ、笠、川、男性、女性、ハンコ

#### 2 見えたものから何を感じましたか?

(受講生がチャット欄に打ち込んだ内容より抜粋)

- ・急に雨が降ってきて人々が急いで帰っている。
- ・ペトリコール
- ・水平線(?)が傾いていて落ち着かない。
- ・それぞれの人の雨具が違う。貧富?
- ・この人たちはどこから来てどこに行くの?
- ・橋の手前と向こう側で何か違うようだ。
- ・橋を渡る場所が貧しそうなお金がない人たちは端を、お金がある人たちは中程を通っている。

#### 2) 講義「ジャポニズム」

- ・開国と万国博覧会
- ・日本の美術品(浮世絵、陶器、刀剣など)の展示
- ・音楽など多様な文化へ影響。
- ・大橋の現在の様子をGoogleMapで確認。
- ・ゴッホと浮世絵の関係をゴッホ美術館のサイトで確認。

- ・伝統的な遠近法にとらわれない姿勢を元に平面性を追求。

### (14) 第14回授業「短編アニメーション映画の鑑賞」

#### 1) 対話による鑑賞

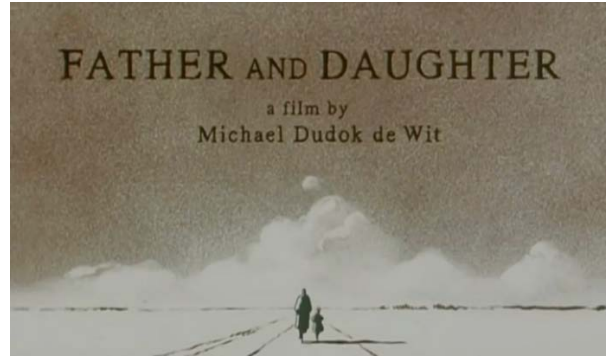


図19:マイケル・デュドク・ドゥ・ヴィット「父と娘」<sup>24</sup>

#### 1 図19の動画視聴後「タイトルを考えてみよう」

(受講生がチャット欄に打ち込んだ内容より抜粋)

待ち続ける、別れ、再開、自転車と女性、時間の流れ、父を待つ娘、きずな、紡ぐ距離と離れた時間

#### 2 映画を視聴して疑問に思ったことは?

(受講生がチャット欄に打ち込んだ内容より抜粋)

- ・なぜ父親は娘を置いていったのか
- ・最後に娘が若返った意図
- ・海(?)が干上がった理由
- ・ママは……?
- ・途中の強い向かい風の意味

#### 3 疑問に思ったことを話し合いました

(受講生がチャット欄に打ち込んだ内容より抜粋)

- ・海外の文化に三途の川概念あるかな?
- ・自転車は命みたいな意味だったりするのか
- ・自転車が何度も倒れている様子が心電図を想起させる。
- ・やっぱり、最後を除いて、友達と来た時だけ画面右側に帰らずに、友達と一緒に画面左へ進んでいったのが印象的だったな。
- ・海、こんなに綺麗に遠くまで水平線が見えるのは湖等だと広過ぎる?
- ・戦争ってのもありそうだけど。
- ・自分にとって大事な人が変わった…?
- ・彼岸へ渡った。
- ・「雲=母」の考えにうわあ～(泣)って感じです。

この回の授業は、動画を題材にすることから、鑑賞の時間の確保が通常時より多く必要になるため、全体を対話による鑑賞で構成し、講義を割愛した。

## 7. 結果

### 1 アンケートの実施期間

クラス13:令和5年7月24日(月)11:40～令和5年7月28日(金)午後11時

クラス14:令和5年7月26日(水)13:10～令和5年7月30日(日)午後11時

### 2 アンケートの方法

最終の第15回目の授業時間内において、本授業アンケートは全員提出に該当するものであることを説明した上で、アンケート内容が掲載されたGoogleFormsのURLを提示した。

### 3 回答者数

クラス13:34/73名(回答率 46.6%)

クラス14:24/59名(回答率 40.1%)

#### (1) 初心者向けの授業設定について

##### クラス13

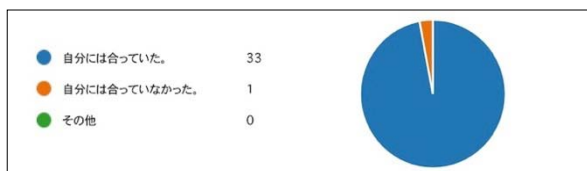


図20:初心者向けの授業設定に関するクラス13の返答結果

#### ○ポジティブなコメントより(抜粋)

- ・高校で美術史がなかったので、大体の美術史の流れを掴むことができてよかったです。
- ・美術の知識があることを前提に美大に入学している人は少ないと思うため、このように初心者でも自由な見解を持って授業に参加できました。

#### ●ネガティブなコメント

記載無し

##### クラス14

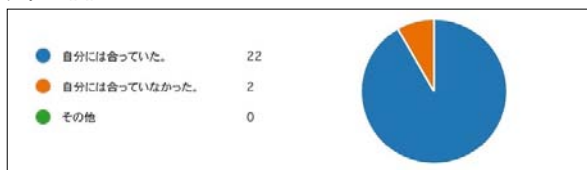


図21:初心者向けの授業設定に関するクラス14の返答結果

#### ○ポジティブなコメントより(抜粋)

- ・初心者向けとは言っても知識のあるひともない人も楽しめる授業であったように感じます。
- ・初心者向けと書いてはあったが、じっくり鑑賞することやその背景について知れたりと中級者やある程度の美術経験者でも楽しめるし新たな学びがあると感じた。

#### ●ネガティブなコメントより(抜粋)

- ・初心者向けの美術史であることを承知のうえ受講したが、美術大学の学生であれば知っているような内容が多々見られ、退屈する時間が多かった。初歩的な美術史の講義を行なう理由がよく分からなかった。

#### (2) テーマ設定による授業実施について

##### クラス13

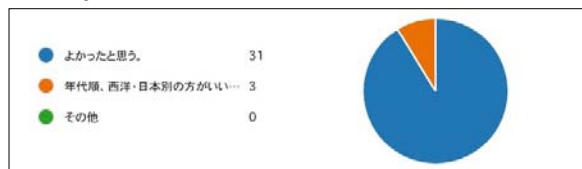


図22:テーマ設定による授業実施に関するクラス13の返答結果

#### ○ポジティブなコメントより(抜粋)

- ・教科書通りだと教科書を読むだけで理解できるので、テーマごとの設定は楽しかったです。
- ・美術史の歴史を学ぶという点では年代順でもいいと思ったが、テーマ別の方が個人的に一回一回の授業にメリハリがあり、良いと思った。
- ・年代や国を越えて鑑賞でき、楽しいです。
- ・興味を惹かれるテーマ設定で、わくわくした。

#### ●ネガティブなコメントより

- ・作品がいつの時代のものなのかが分かりにくかった。

##### クラス14

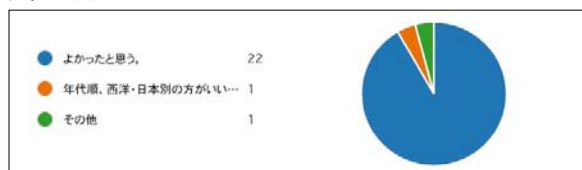


図23:テーマ設定による授業実施に関するクラス14の返答結果

#### ○ポジティブなコメントより(抜粋)

- ・その授業で取り扱う絵画が何を伝えたいのか、また授業内の狙いがわかりやすくなりました。
- ・年代、国問わずいろんなジャンルを一つのテーマにまとめたことでたくさんのが学べた。
- ・時間の流れで丸暗記しようと思わず、興味を持ったら自分で調べようと思えたからです。

・年代で見るという見方もあると思うが、テーマで見ているからこそその比較鑑賞ができたと思います。

●ネガティブなコメント

記載無し

(3)「対話による鑑賞」に楽しさや学びがあったか

クラス13

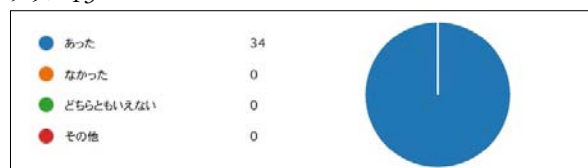


図24:対話による鑑賞の学びに関するクラス13の返答結果

○ポジティブなコメントより(抜粋)

- ・毎回の授業すごく楽しみで月曜日が一番特別な日だった。
- ・対面よりもズームの方が意見出しやすくて良かったです。
- ・自身が知っている作品が取り上げられた際、他の人がどの様に感じるのか、考えるのかを聞いてる時が非常にワクワクした。
- ・匿名でネット上ではあるものの、知らない人と鑑賞して感想や発見を共有するという体験は今までになかったもので、同じ授業は二度とないと思うと非常に心に残る授業でした。
- ・これは本当に正解だと思います。自分が見てるだけでは気が付かないことやなかった視点を持てたのでどの回も非常に楽しかったです。

クラス14

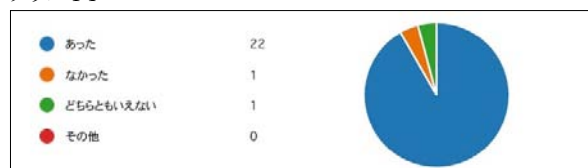


図25:対話による鑑賞の学びに関するクラス14の返答結果

○ポジティブなコメントより(抜粋)

- ・自分の意見を否定されずに言えることで、意見をはっきり持つことができ、また他の人のまっすぐな意見も知ることができるので自分では思いつかないような考えを知ることができるので、とても楽しかったです。
- ・他の人の考えも覗けてズームなのに閉鎖的ではなくて楽しかった。
- ・自分では考えつかない意見が沢山開けて価値観が変わると感じた。
- ・異なる学科の方からの様々な意見が聞けて学びに繋がりました。

●ネガティブなコメントより

- ・受講者の意見が重複していく点、話を聞いていないことがよく分かる。みんなに見てほしいなど発言した意見に賛同する声も聞こえない。

(4)「対話による鑑賞」と講義のセットによる授業実施について

クラス13

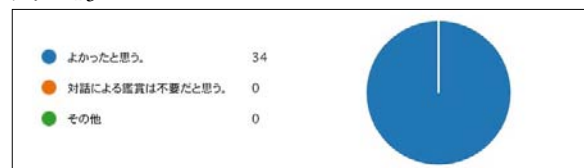


図26:対話による鑑賞と講義のセットによる授業実施に関するクラス13の返答結果

○ポジティブなコメントより(抜粋)

- ・みんなで話したことは新たな発見につながってとても楽しかったし、その後に先生が講義をしてくださることで作品の答え合わせのような(作品に答えなど無いが)事実確認ができたので良いと思う。
- ・作品を知った上での講義だったため、理解が深まった。
- ・対話による鑑賞で互いに意見を深め合った後、実際の作品の意味や詳しい解説を開けるので印象に残り、学びやすかった。
- ・講義だけでは興味を持てなかったりすることもあるのですが、対話による鑑賞を行うことでその作品と自分に接点ができるので、興味を持ちやすい授業展開だったと思います。
- ・一限分では短いので二限分やりたい。

クラス14

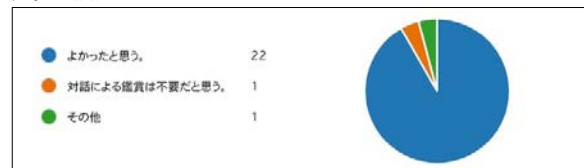


図27:対話による鑑賞と講義のセットによる授業実施に関するクラス14の返答結果

○ポジティブなコメントより(抜粋)

- ・体験して学ぶ、美術史でもこのようなやり方ができると感じました!覚えやすかったです!
- ・対話による鑑賞でみんなの様々な意見や自分の考えを踏まえて、講義が受けられてわかりやすかったです。
- ・対話による鑑賞だけでなく、補足するように講義を行なったことで、より知識を得ることができました。

- ・自分の意見だけでなく、対話による鑑賞では他の人の意見も聞くことができ、講義では先生や作者の意見・考えをお聞きすることができて良かった。

●ネガティブなコメントより

- ・不要とは思わないが、分量を考えた方がいいと思う。

(5) ニックネームの設定による授業実施について

クラス13

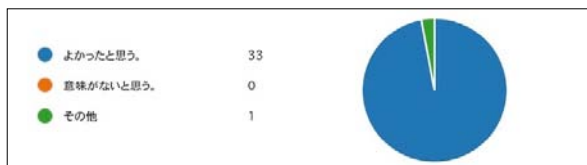


図28:ニックネームの設定に関するクラス13の返答結果

○ポジティブなコメントより(抜粋)

- ・新しく名前を考えるのが楽しかったし、長い学籍番号を呼ばれるよりは「自分だ!」ってわかりやすかった。

●ネガティブなコメントより

- ・わざわざニックネームをつける必要があったのでしょうか?

クラス14

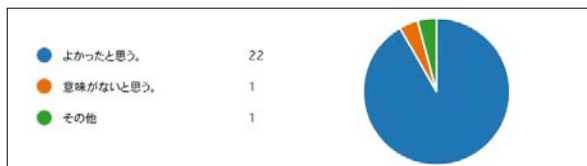


図29:ニックネームの設定に関するクラス14の返答結果

○ポジティブなコメントより(抜粋)

- ・話しやすい環境に繋がったと思います。

●ネガティブなコメントより

- ・実際に対話をしているわけではないので必要性を感じなかった。

(6) リフレクションシートの内容について

クラス13

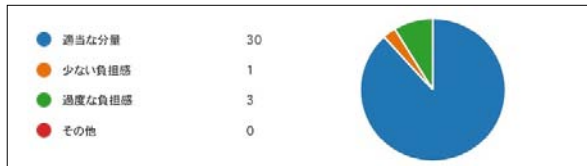


図30:リフレクションシートに関するクラス13の返答結果

○ポジティブなコメントより(抜粋)

- ・その日の授業を見つめ直し、改めて向き合うことでさらに新しい発見があり良かったと思う。
- ・授業中には浮かばなかった発想がシートにまとめている

- ・最中に浮かんだりして、またさらに学びを深めることができたように思う。

●ネガティブなコメントより

- ・皆さんがどのくらいの分量書いているのか、どのくらい書けば良いのかあまりよく分からなかったです。

クラス14

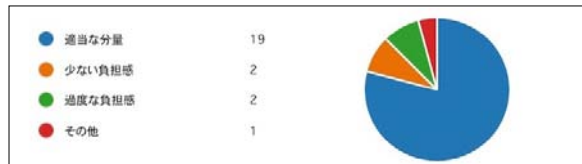


図31:リフレクションシートに関するクラス14の返答結果

○ポジティブなコメントより(抜粋)

- ・振り返る事により、新しい発見を得る事ができる。
- ・負担になり過ぎず授業を振り返ることも出来た。

●ネガティブなコメントより

- ・決して多くはないのですが、学科の課題がかなり大変で負担にはなっていたのが現状です。

(7) 専攻分野と美術史の関連について

クラス13

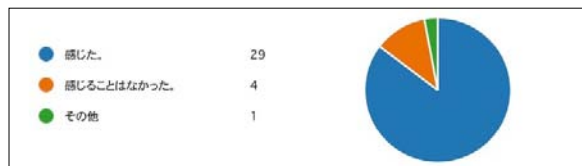


図32:専攻分野との関連に関するクラス13の返答結果

○ポジティブなコメントより(抜粋)

- ・自分は映像学科であり繋がりは薄いかなと思っていましたが意外にも映像の原点になっている美術があったのが驚きでした。
- ・教育普及プログラムの一環として取り組む事が出来そうだと感じた。

●ネガティブなコメント

記載無し

クラス14

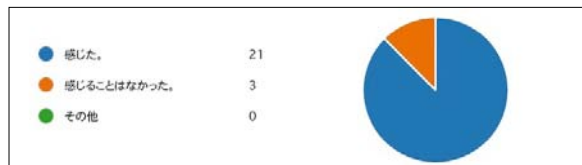


図33:専攻分野との関連に関するクラス14の返答結果

○ポジティブなコメントより(抜粋)

- ・新たに私たちの下の学年から、工芸デザイン学科になり

戸惑うことも多く、何が違うのかよくわからなかったが、じっくり考えるきっかけになった。新たに取り入れてみたい表現方法や概念なども多かった。

- ・新しい考え方やアイデアをみつけられた。

●ネガティブなコメント

記載無し

(8)美術館に行ってみたくなかったか

クラス13

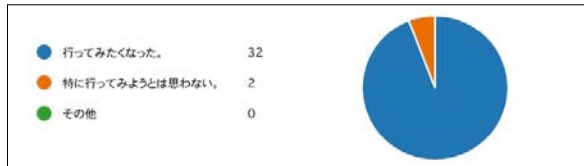


図34:美術館に関するクラス13の返答結果

○ポジティブなコメントより(抜粋)

- ・夏休みの間旅行先で行ってみたいと思いました。企画展をしていると尚更楽しみです。
- ・1人でというよりは誰か友達と行ってみたいなと思いました。映画を見に行く感覚で見終わったあとカフェなどで語り合うのもいいなと思います。

●ネガティブなコメント

記載無し

クラス14

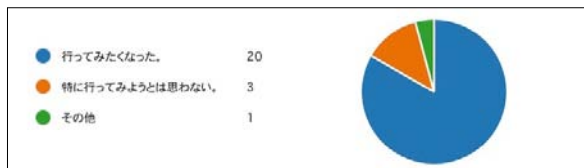


図35:美術館に関するクラス14の返答結果

○ポジティブなコメントより(抜粋)

- ・キャプションを読まずに鑑賞したい!授業を参考にしながら友達と考察するのも楽しそう!
- ・現代の主流である現代アートにもう少し積極的に臨める気がする。

●ネガティブなコメント

記載無し

(9)美術史への興味や関心について

クラス13

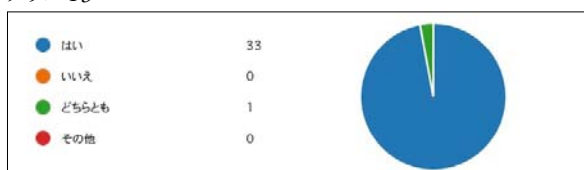


図36:美術史への興味や関心に関するクラス13の返答結果

○ポジティブなコメントより(抜粋)

- ・先人達が残してくれた作品がまだまだたくさんあるので、作品を調べるには興味がないと起こらない行動で美術史の授業で作品をよく調べるようになった。そこで自分のすごい好きな作風の画家を見つける事もできた。
- ・美術の動きと史実との繋がりを読み解いていくことが楽しいと思いました。
- ・歴史が不得意だったため苦手意識は大きかったが、作品との向き合い方を学べたので美術館に行ったり作品を見たりすることが楽しくなった。

●ネガティブなコメント

記載無し

クラス14

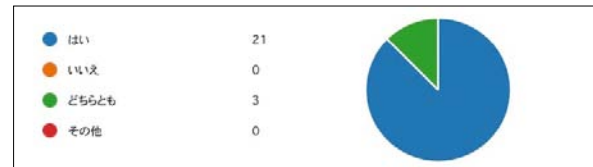


図37:美術史への興味や関心に関するクラス14の返答結果

○ポジティブなコメントより(抜粋)

- ・歴史アレルギーだった自分も楽しむことができ驚きと探究心が芽生えました。
- ・歴史に残るって凄い。
- ・歴史に思いを馳せるには最適な題材だと感じた。
- ・洋画コースの私にとっては自分で作品作りする際にも知っておきたい知識も増えて、とても面白かったです!

●ネガティブなコメント

記載無し

(10)美術史の履修による自身の変化について

クラス13より抽出

- ・作品に目を向けている時間が長く深くなった。
- ・美術=難しいものという印象が身近なもの(親近感)という印象に変わりました。
- ・作品を長く鑑賞するようになった。決めつけや思い込みで見ることがなくなった。
- ・鑑賞する際の視点が増えた。

クラス14より抽出

- ・絵を一つで判断するのではなく2つほど似たものを比較する楽しさを知った。
- ・美術は正解があって難しいものだと感じていたがそうではなくて、自分の中でいろいろな考え方をして自分なりの答えをみつけることが大事であることが分かった。

- ・ 作品を見る目が変わった!!すぐ考察に入るよりも見えるものを探してからの方が考察が捗ることに気づいた!
- ・ ビフォー：歴史=過去の出来事の丸暗記。アフター：自分が興味を持ったことの背景を知ると、自然と歴史が見えてくる。

(11) 記憶の残る授業テーマ(鑑賞題材)を教えてください。

クラス13

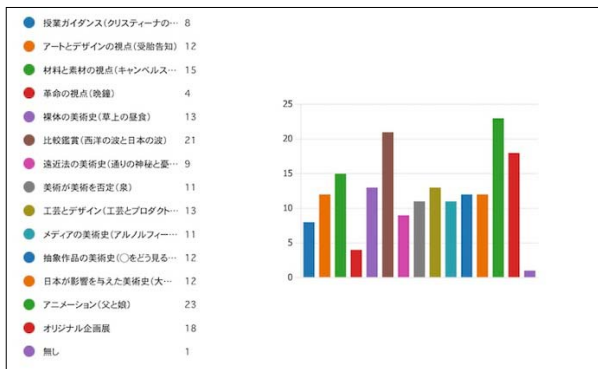


図38:記憶に残る授業テーマ(m鑑賞題材)／クラス13の返答結果

クラス14

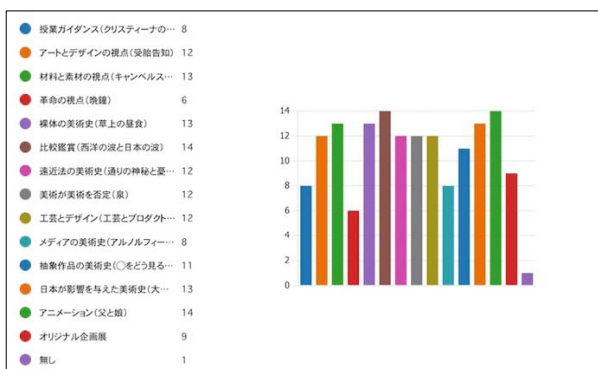


図39:記憶に残る授業テーマ(鑑賞題材)／クラス14の返答結果

(12) テーマを変えた方がいいと思うもの

クラス13

- ・ 変更該当するテーマ無し(33名)
- ・ 「裸体の美術史(草上の昼食)」(1名)

クラス14

- ・ 変更該当するテーマ無し(20名)
- ・ 「アートとデザイン(受胎告知)」(1名)
- ・ 「材料と素材(キャンベルス…)」(2名)
- ・ 「比較鑑賞(西洋と日本の波)」(1名)
- ・ 「美術が美術を否定(泉)」(1名)
- ・ 「ジャポニズム(大橋あたけの夕立)」(1名)
- ・ 「メディア(アルノルフィーニ夫妻)」(1名)
- ・ 「抽象作品の見方」(1名)

- ・ 「工芸とデザイン」(1名)
  - ・ 「遠近法(通りの神秘と憂愁)」(1名)
- 尚、クラス14の該当テーマについては、2名の複数回答の結果である。

(13) 自分の言葉で「美術史」を表現するならば

クラス13より抽出

- ・ 美術と人の変化の歴史
- ・ その時代を知ること
- ・ アート&デザインの歴史
- ・ 新たな視点を見つける
- ・ 自分の知識や見方を広げ、未来を豊かする為に必要なもの。

クラス14より抽出

- ・ これからの私を作りあげてくれるもの。
- ・ 多視点 多様性
- ・ 美術史と鑑賞を通じて、自分にも新たな知識を取り入れるものだ。
- ・ 影響されあって新たな価値が生み出されるもの
- ・ 人が紡いできた想いの歴史
- ・ 知れば知るほど魅力に溢れているもの

8. 考察

両クラスの9割を超す受講生が以下の7項目について満足感などを得ていることから、それぞれの取り組みとその総体として概ね成果はあるということを示している。

- ・ 初心者向けの授業設定
- ・ テーマ設定による授業実施
- ・ 対話による鑑賞
- ・ 対話による鑑賞と講義のセット
- ・ ニックネームの設定
- ・ 美術館に行ってみたくなくなったか
- ・ 美術史への興味や関心の向上

また、以下の2項目については、9割を下回ったものの8割を超える受講生が満足感などを得ていることから、上記と同様に概ね取り組みの成果があるということを示唆している。

- ・ リフレクションシートの内容
- ・ 専攻分野と美術史の関連

また、テーマを変えた方がいいと感じるものに関する質問では、回答した中の91.4%の受講生が「変更該当する



テーマ無し」と返答したことから、個々のテーマ設定についても概ね妥当であることが示された。

しかしこれらの成果について「概ね」としたことには理由がある。それはアンケートの回答率が高くないことに由来する。両授業の最終授業内において、アンケートの回答についてスライドを使いながら丁寧に伝えることに心がけたが、オンライン授業の性格もあってか高い回答率を達成させることができなかった。

## 9. 今後の課題

### (1) 「対話による鑑賞」について

第1段階の「何が見えたか」の記述の前に、「作品タイトルをつける」ことを検討したい。なぜなら、そのタイトルはその人が感じた、作品の第一印象を反映させた短い言葉で表したものであり、以降の活動における作品の見え方や感じ方の変化の基準となるからである。

また、鑑賞活動の最後において、代表的な画集などにおける解説文との比較を試みたい。これまでの授業では、画集などのテキストを紹介することは、何か正解めいたものを提示し、答え合わせのようになることを危惧していた。しかし、いくつかの授業の中でそのような解説文を紹介した時に、受講生は必ずしもその内容に流されることはなく、むしろ自分たちの解釈の多様性に満足していることが伺われたことによる。

しかし、それには授業内の時間配分が大きな課題となる。ある程度は効率的な進め方を余儀なくされるであろうが、受講生とコンセンサスを図りながら解決していきたい。

### (2) リフレクションシートについて

昨年度は、提出されたリフレクションシートの中から、記載事項のいくつかを、授業冒頭でふり返りを兼ねて紹介していた。しかし、多様かつ魅力的なコメントが多いことから時間を要してしまい、対話による鑑賞とその後の講義に影響が出るのが少なくなかった。そのことから今年度はリフレクションシートの紹介を控えることにしたのだが、一方で昨年の授業において記載内容が取り上げられた受講生はとても喜び、以降の授業にさらに積極性をみせたという実態もある。

このようなことから大学が実施している授業改善アンケートでは、授業時間の不足を感じている受講生がこの授業の

2時間続きの開講を要望している。リフレクションシートの効果的な活用を含め、自学時間のさらなるアプローチを検討していきたい。

### (3) 美術史と専攻分野の関連について

これまでは美術史と各専攻分野の関連性については、授業の中のコメントとして触れることに留めてきたが、今後はスライド上に明記するなどして、ビジュアル的に明確に伝え理解が図られるよう努めていきたい。そのためには、筆者自身の各専攻の活動内容の把握が重要になる。学内外の諸活動に対してこれまで以上に関心を寄せていきたい。

### (4) アンケートの回答率向上について

本実践研究における受講生のアンケート回答率は50%を下回るものであった。同時期に大学で実施する「授業改善アンケート」と共に、本アンケートは重要な調査であることをこれまで以上に丁寧に受講生に説明し、協力をお願いしていきたい。その基盤となるのは、何より毎回の授業における授業者への信頼感と、授業内容の明確さにかかっていると考える。本授業は履修登録の際に、他の授業の履修が叶わなかった学生が多数入ってくるという実情がある。確かにその時点において、受講生は自身の興味や関心と合致した授業カリキュラムではなく、不本意な気持ちからの若干の不満もあることと思う。しかし、それらの気持ちが好転するように、受講生の希望を今まで以上に把握し、柔軟に対応していくなど、丁寧な授業展開を心がけていくことが肝要であると考えられる。これらのことを通して、リモートという特殊な授業方法であっても、より多くの受講生と心が通じ合うような授業となるよう努力を重ねていきたい。

### 謝辞

本授業に積極的に取り組んでくれた多くの受講生に感謝いたします。

### 註

- 1 藤原逸樹「共通教育科目「芸術A」(美術史)の授業設計の検討」安田女子大学紀要,2013,41号,pp.263-271
- 2 奥村高明「教育の生態系と資源」日本文教出版Webマガジン「学び!と美術」,<https://www.nichibun-g.co.jp/data/web-magazine/manabito/art/art016/>(参照2023-09-03)
- 3 藤原、前掲論、P.265.
- 4 岩佐まゆみ「高等学校専門学科美術科における主体的・対話的で深い学びを促す美術史学習モデルの開発」美術による学び,2020,1巻,.5号,ID:202005

- 5 「対話による意味生成的な美術鑑賞」については上野行一の『風神雷神はなぜ笑っているのか(対話による鑑賞完全講座)』(光村図書出版 2014)、同著『私の中の自由な美術—鑑賞教育で育む力』(光村図書出版 2011)などに詳しい。
- 6 美術検定実行委員会(編)『改訂版 西洋・日本美術史の基本美術検定1・2・3級公式テキスト』美術出版社,2014
- 7 Andrew Wyeth「Christina's World(1948)」(MoMA Website) <https://www.moma.org/collection/works/78455> (参照2021/4/02)
- 8 Fra Angelico「The Annunciation」Public Domain(参照2021/4/02)
- 9 Andy Warhol「Campbell's Soup Cans(1962)」(MoMA Website) <https://www.moma.org/collection/works/79809> (参照2021/4/02)
- 10 ピーター・ウェーバー(監督)「真珠の耳飾りの少女(原題:Girl with a Pearl Earring)」2003,ギャガ,2005,(DVD)
- 11 Jean-François Millet「The Angelus(1857-1859)」Public Domain(参照2021/4/21)
- 12 Jean-François Millet「The Gleaners(1857)」Public Domain(参照2021/4/21)
- 13 Edouard Manet「Luncheon on the Grass(1863)」Public Domain(参照2021/4/25)
- 14 Gustave Courbet「The Wave(1870)」Public Domain(参照2021/05/05)
- 15 葛飾北斎「神奈川沖浪裏(1830-1832)」Public Domain(参照2021/04/18)
- 16 Giorgio de Chirico「Mystery and Melancholy of a Street(1914)」(WebSite:WIKIART) <https://www.wikiart.org/en/giorgio-de-chirico/mystery-and-melancholy-of-a-street-1914> (参照2021/05/01)
- 17 武蔵野美術大学(WebSite:MAU造形ファイル) <http://zokeifile.musabi.ac.jp/> 遠近法/(参照2021/06/02)
- 18 Marcel Duchamp「Fountain(1917)」(WebSite:ARTLIFE) <https://artslife.com/wp-content/uploads/2021/07/duchamp.jpg> (参照2021/05/01)
- 19 深澤直人(監)『工芸とデザインの境目』六曜社,2016,pp86-87
- 20 Jan van Eyck「Arnolfini Portrait(1434)」Public Domain(参照2021/05/05)
- 21 荒俣宏(著)『荒俣宏の画像学入門』マドラ出版,1992,pp.6-19の内容を参考に筆者が3分類し受講生に提示した。
- 22 山竹弘己「中学校における抽象絵画の指導についての一考察—類型化の試み—」美術教育学研究,2019,51巻,1号,P.338において3つに整理された抽象形の類型化を筆者が再構成して受講生に提示した。
- 23 歌川広重「大橋あたけの夕立(1856)」Public Domain(参照2021/4/12)
- 24 マイケル・デュドク・ドゥ・ヴィット(監督)アニメーション映画「Father and Daughter(2000)」(8分)

【参考文献】

【古代期に関する文献等】

(監)木村重信,高階秀爾,樺山紘一(著)木村重信,谷一尚,鈴木まどか,勝又俊雄,水田徹『名画への旅(1)美の誕生—先史・古代』講談社,1992

(監)木村重信,高階秀爾,樺山紘一(著)勝又俊雄,名取四郎,浅野和生,鐸木道剛,篠塚千恵子,益田朋幸,木村重信『名画への旅(2)光は東方より—古代2・中世1』講談社,1992

【中世期に関する文献等】

(監)木村重信,高階秀爾,樺山紘一(著)鶴岡真弓,安発和彰,鼓みどり,木戸雅子(著・編)高野禎子,鐸木道剛『名画への旅(3)天使が描いた—中世2』講談社,1992

(監)木村重信,高階秀爾,樺山紘一(著)安発和彰,高野禎子,富田知佐子,木戸雅子,鐸木道剛,保井亜弓『名画への旅(4)天国へのまなざし—中世3』講談社,1992

中島智章(著)『図説 キリスト教会建築の歴史』河出書房新社,2021

【ルネサンス期に関する文献等】

澤井繁男(著)『イタリア・ルネサンス』講談社,2001

西洋美術研究編集委員会(編)『西洋美術研究(No.2)特集美術アカデミー』三元社,1999

田中久美子(著)『入門ルネサンス』洋泉社,2013

松本典昭(著)『パトロンたちのルネサンス』日本放送出版協会,2007  
レオン・バッティスタ・アルベルティ(著),三輪福松(訳)『絵画論』中央公論美術出版,2011

【近代期に関する文献等】

巖谷國士(著・編)『ユリイカ シュルレアリスム』青土社,1976

國貞陽一(編),磯部順子(編),渡部多香(編)『夜想シュルレアリスム』ベヨトル工房,1995

齊藤哲也(著)『零度のシュルレアリスム』水声社,2011

高階秀爾(著)『近代絵画史(上)』中央公論新社,2017

高階秀爾(著)『近代絵画史(下)』中央公論新社,2017

種村季弘(編)『ユリイカ臨時増刊号 タダイズム』青土社

中村英樹(著),谷川渥(著)『アート・ウォッチング(2)近代美術編』美術出版社,1994

モーリス・セリユラス(著),平岡昇(訳)『印象派』白水社,1992

マグダレーナ・ドロステ(著)『パウハウス1919-1933』ベネディクト・タッセン,1999

(監)木村重信,高階秀爾,樺山紘一(著)高橋達史,荒川裕子,鈴木杜幾子,高橋裕子,横山紘一,雪山行二『名画への旅(16) 絵画と革命—18世紀2』講談社,1992

(監)木村重信,高階秀爾,樺山紘一(著)人見伸子,矢野陽子,高橋明也,大原まゆみ,太田泰人,鈴木杜幾子,(編)高階秀爾『名画への旅(17) さまよえる魂—19世紀1』講談社,1992

(監)木村重信,高階秀爾,樺山紘一(著)鈴木杜幾子,馬淵明子,大原まゆみ,隠岐由紀子,太田泰人,高階秀爾『名画への旅(18) 都市のユートピア—19世紀2』講談社,1992

(監)木村重信,高階秀爾,樺山紘一(著)高階秀爾,大森達次,長谷川祐子,太田泰人,六人部昭典,丹尾安典『名画への旅(19) 屋外へ出たカンヴァス—19世紀3』講談社,1992

(監)木村重信,高階秀爾,樺山紘一(著)隠岐由紀子,山本敦子,高

橋裕子,高橋達史,荒川裕子『名画への旅(20) 音楽をめざす絵画—19世紀4』講談社,1992  
(監)木村重信,高階秀爾,樺山紘一(著)丹尾安典,坂上桂子,高階秀爾,園府寺司,大森達次,水沢勉(編)第一出版センター『名画への旅(21) 世紀末の夢—19世紀5』講談社,1992  
(監)木村重信,高階秀爾,樺山紘一(著)石鍋真澄,岡田温司,森田義之,森雅彦,諸川春樹,(編)樺山紘一『名画への旅(5) 天上から地上へ—初期ルネサンス1』講談社,1992  
(監)木村重信,高階秀爾,樺山紘一(編)樺山紘一,森田義之『名画への旅(6) 春の祭典—初期ルネサンス2』講談社,1992  
(監)木村重信,高階秀爾,樺山紘一(編)樺山紘一,森田義之『名画への旅(7) モナリザは見た—盛期ルネサンス1』講談社,1992  
(監)木村重信,高階秀爾,樺山紘一(著)森田義之,鈴木杜幾子,望月一史,高橋裕子,諸川春樹『名画への旅(8) ヴェネツィアの宴—盛期ルネサンス2』講談社,1992  
(監)木村重信,高階秀爾,樺山紘一(著)小林典子,西野嘉章,高橋達史,小池寿子,神原正明,高野禎子『名画への旅(9) 北方に花ひらく—北方ルネサンス1』講談社,1992  
(監)木村重信,高階秀爾,樺山紘一(著)高橋裕子,樺山紘一,小池寿子,岩井瑞枝,(著,編)高橋達史,高野禎子『名画への旅(10) 美はアルプスを越えて—北方ルネサンス2』講談社,1992  
(監)木村重信,高階秀爾,樺山紘一(著)岡田裕成,高橋裕子,石鍋真澄,宮下規久朗,浦上雅司,森田義之,(編)高橋達史『名画への旅(11) バロックの闇と光—17世紀1』講談社,1992  
(監)木村重信,高階秀爾,樺山紘一(著)大高保二郎,高野禎子,藤田治彦,高橋裕子,雪山行二,栗田秀夫,大野芳材,(編)高橋達史『名画への旅(12) 絵の中の時間—17世紀2』講談社,1992  
(監)木村重信,高階秀爾,樺山紘一(著)小林頼子,堤委子,(編)高橋達史,高橋裕子『名画への旅(13) 豊かなるフランドル—17世紀3』講談社,1992  
(監)木村重信,高階秀爾,樺山紘一(著)高橋達史,藤田尚男,小林頼子,尾崎彰宏,藤田治彦,有川治男『名画への旅(14) 市民たちの画廊—17世紀4』講談社,1992  
(監)木村重信,高階秀爾,樺山紘一(著)大野芳材,下浜晶子,鈴木杜幾子,伊藤巳令,越川倫明,森田義之『名画への旅(15) 逸楽のロココ—18世紀1』講談社,1992  
【現代期に関する文献等】  
梅田一穂(著),美術出版社編集部(編)『現代美術入門』美術出版社,1986  
筧菜奈子(著)『いとをかしき20世紀美術』亜紀書房,2022  
(監)木村重信,高階秀爾,樺山紘一(著)南雄介,高野禎子,西野嘉章,太田泰人,天野知香,水沢勉,高階秀爾『名画への旅(22) 独歩する色とたち—20世紀1』講談社,1992  
(監)木村重信,高階秀爾,樺山紘一(著)五十殿利治,前田富士男,太田泰人,諸川春樹,木村重信『名画への旅(23) モダン・アートの冒険—20世紀2』講談社,1992  
暮沢剛巳(著)『現代アートナメ読み』東京書籍,2008  
田中為芳(編)美術手帖『特集 現代美術の素材と技法』美術出版社,1999  
トム・ウルフ(著),高島平吾(訳)『現代美術コテンパン』晶文社,1984  
トニー・ゴドフリー(著),水幡和枝(訳)『コンセプチュアル・アート』岩波

書店,2001  
ハインリヒ・リュッツェラ(著),西田秀穂(著)『抽象絵画—意味と限界』美術出版社,1973  
長谷川祐子(著)『女の子のための現代アート入門』淡交社,2010  
美術手帖編集部(著,編)『現代アート事典 モダンからコンテンポラリーまで……世界と日本の現代美術用語集』美術出版社,2009  
広本伸幸(著)『猫も大好き!現代アート』淡交社,2003  
フィリップ・イェナワイン(著),木下哲夫(訳)『モダンアートの見かた』美術出版社,1993  
別冊宝島編集部(著)『現代美術・入門』宝島社,2004  
本江邦夫(著)『●▲■(マル・サンカク・シカク)の美しさって何?—20世紀美術の発見』ポプラ社,1991  
(著)山口晃,しりあがり寿,松本次郎,御幸朋寿,堀江秀史,竹久侑,村田真,土屋誠一,谷口幹也,宮津大輔,三ツ木紀英,山木朝彦,橋本誠,(編)フィルムアート社『現代アートの本当の見方』フィルムアート社,2014  
吉田敦彦(著)『抽象絵画のすすめ』美術年鑑社,2013  
【西洋美術全般に関する文献等】  
青柳正規(監)『小学館の図鑑NEOアート 図解 はじめての絵画』小学館,2023  
荒俣宏(著)『図の劇場』朝日新聞社,1994  
池上英洋(著)『大学4年間の西洋美術史が10時間でざっと学べる』KADOKAWA,2020  
井出洋一郎(著)『聖書の名画はなぜこんなに面白いのか』中経出版,2010  
伊藤亜紗(著)『感性でよむ西洋美術』NHK出版,2023  
小笠原尚司(著)『額縁からみる絵画』八坂書房,2015  
岡田温司(著)『ヴィーナスの誕生 視覚文化への招待』みすず書房,2006  
岡部昌幸(著)『教養としての名画』青春出版社,2004  
嘉門安雄(著)『西洋美術史』美術出版社,1972  
神林恒道(著),新関伸也(著)『西洋美術101鑑賞ガイドブック』三元社,2008  
木村泰司(著)『名画は嘘をつく』大和書房,2014  
木村泰司(著)『名画は嘘をつく2』大和書房,2015  
沢辺有司(著)『ワケありな名画』彩図社,2015  
榎木野衣(著)『反アート入門』幻冬舎,2010  
清水康(著)『禁断のエロティシズム 異端・背徳の美術史』青土社,1992  
白川昌生(著)『西洋美術史を解体する』水声社,2011  
J・ホール(著),高階秀爾(訳)『新装版 西洋美術解説事典』河出書房新社,2004  
スティーヴン・リトル(著),藤野優哉(訳)『“イズム”で読みとく美術』新樹社,2006  
千足伸行(著)『6つのキーワードで読み解く西洋絵画の謎』大和書房,2015  
高階秀爾(著)『西洋美術史』美術出版社,1990  
田中英道(監)『西洋美術への招待』東北大学出版会,2002  
西岡文彦(著)『モナリザはなぜ名画なのか?』筑摩書房,2013  
早坂優子(著)『マリアのウインク—聖書の名シーン集』視覚デザイン研究所,1995

美術検定実行委員会(編)『絵でわかるアートのコトバ』美術出版社,2011

美術手帖編集部(著)『美術手帖「スード」』美術出版社,2011.

藤原えりみ(著)『西洋絵画のひみつ』朝日出版社,2010

布施英利(著)『新編 脳の中の美術館』筑摩書房,1996

フランソワーズ・バルブ・ガル(著),栗原千恵(訳)『フランス流はじめての名画の見方』パイインターナショナル,2010

堀越啓(著)『西洋美術は「彫刻」抜きには語れない 教養としての彫刻』翔泳社,2022

マルシア・ポイントン(著),木下哲夫(訳)『はじめての美術史』スカイドア,1995

森村泰昌(著)『美しい』ってなんだろう?—美術のすすめ』理論社,2007

ライクウォーター(編)『アートの大学』ディーエイチシー,1995

ロバート・カミング『名画の謎《作品編》』ゆまに書房,2000

ロバート・カミング『名画の謎《作家編》』ゆまに書房,2000

綿引弘(著)『「怖い絵」で読む世界の歴史』三笠書房,2009

【日本の美術に関する文献等】

(構成・執筆)大谷省吾,花井久穂(執筆)長名大地,小林紗由里,鈴木勝雄,都築千重子,鶴見香織,中村麗子,成相肇,榊田倫広,増田玲,三輪健仁,横山由季子(翻訳)小川紀久子『東京国立近代美術館70周年記念展 重要文化財の秘密』(公式図録)毎日新聞社,日本経済新聞社,東京国立近代美術館,2023

神林恒道(著),新関伸也(著)『日本美術101鑑賞ガイドブック』三元社,2008

小松茂美『本の絵巻(7) 餓鬼草紙 地獄草紙 病草紙 九相詩絵巻』中央公論社,1994

財団法人佐野美術館(編集)『幕末・明治の超絶技巧 世界を驚嘆させた金属工芸—清水三年坂美術館コレクションを中心に』財団法人佐野美術館,2010

佐藤晃子(著)『常識として知っておきたい日本の絵画50』河出書房新社,2006

榊原悟(著)『日本絵画のあそび』岩波書店,1998

辻惟雄(監)『増補新装 カラー版日本美術史』美術出版社,2003

辻惟雄(著)『日本美術の歴史 補訂版』東京大学出版会,2021

日高薫(著)『日本美術のこぼれ』小学館,2002

村田理如(著)『幕末・明治の工芸—世界を魅了した日本の技と美』淡交社,2006

【遠近法に関する文献等】

井村俊一『アルブレヒト・デューラーの透視図法』,金沢美術工芸大学紀要,52号,2008,P.53

エルヴィン・パノフスキ(著),木田元(訳),川戸れい子(訳),上村清雄(訳)『“象徴(シンボル)形式”としての遠近法』筑摩書房,2009

【比較に関する文献等】

ジョン・バージャー(著),伊藤俊治(訳)『イメージ—視覚とメディア』筑摩書房,2013

東北芸術工科大学美術館大学構想室(編)『私の語るアートとデザイン—東北芸術工科大学からの48章』東北芸術工科大学,2005

平山郁夫(著),高階秀爾(著)『世界の中の日本絵画』美術年鑑社,1994

深澤直人(監)『工芸とデザインの境目』展覧会図録.六耀社,2016.

ブルーノ・ムナリー(著),萱野有美(訳)『芸術家とデザイナー』みすず書房,2008

【美術と社会の関係に関する文献等】

小川敦生(著)『美術の経済“名画”を生み出すお金の話』インプレス,2020

岡崎大輔(著)『なぜ、世界のエリートはどんなに忙しくても美術館に行くのか?』SBクリエイティブ,2018

荻原康子(編),片平雪深(編)『社会とアートのえんむすび1996—2000—つなぎ手たちの実践』ドキュメント2000プロジェクト実行委員,2001

奥村高明(著)『エグゼクティブは美術館に集う』光村図書出版,2015

川内有緒(著)『目が見えない白鳥さんとアートを見に行く』集英社インターナショナル,2021

島本浣(編),岸文和(編)『絵画のメディア学』昭和堂,1998

生活の友社(編)『ARTcollectors'(アートコレクターズ)』2022年11月号,生活の友社,2022

仲谷洋平(著),藤本浩一(著)『美と造形の心理学』北大路書房,1993

ニール・ヒンディ(著),長谷川雅彬(監),小巻靖子(訳)『世界のビジネスリーダーがいまアートから学んでいること』クロスメディア・パブリッシング,2018

フィルムアート社(編),プラクティカネットワーク(編)『アートという戦場—ソーシャルアート入門』フィルムアート社,2005

布施英利(著)『ハイパーアートの解剖学』冬樹社,1991

三浦俊彦(著)『東大の先生! 超わかりやすくビジネスに効くアートを教えて』かんき出版,2020

ミヒャエル・エンデ(著),ヨーゼフ・ボイス(著),丘沢静也(訳)『芸術と政治をめぐる対話 岩波書店,1992

【美術鑑賞に関する文献等】

青い日記帳(著)いちばんやさしい美術鑑賞 筑摩書房,2018

アメリカ アレナス(著),川村記念美術館(監),福のり子(訳)『なぜ、これがアートなの?』淡交社,1998

アメリカ アレナス(著),木下 哲夫(訳)『みる・かんがえる・はなす。鑑賞教育へのヒント』淡交社,2001

池上英洋(著)『絵画の見かた』新星出版社,2013

飯塚武夫(著)『誰でも楽しめる美術展・美術館鑑賞術』文芸社,2004

今道友信(著)『美について考えるために』日美学園,2011

岩本康裕(著)『「分析批評」による名画鑑賞の授業』明治図書出版,1990

上野行一(監)『まなごしの共有—アメリカ・アレナスの鑑賞教育に学ぶ』淡交社,2001

上野行一『私の中の自由な美術—鑑賞教育で育む力』光村図書出版,2011

上野行一『風神雷神はなぜ笑っているのか(対話による鑑賞完全講座)』光村図書出版,2014

神林恒道(監),ふじえみつる(監)『美術教育ハンドブック』三元社,2018

ダニエル アラス(著),宮下 志朗(訳)『なにも見えていない—名画をめぐる六つの冒険』白水社,2002

壺屋めり(著)『みるみるわかる「西洋絵画の見方」』小学館,2022

---

西岡文彦(著)『簡単すぎる名画鑑賞術』筑摩書房,2011  
平野智紀(著)『鑑賞のファシリテーション』あいり出版,2023  
フィルムアート社(編),プラクティカネットワーク(編)『アート・リテラシー  
入門—自分の言葉でアートを語る』フィルムアート社,2004  
藤田令伊(著)『アート鑑賞、超入門! 7つの視点』集英社, 2015  
(編)ヘレン・チャーマン, キャサリン・ローズ, ギリアン・ウィルソン(訳)奥  
村高明,長田謙一,酒井敦子,品川知子『美術館活用術 鑑賞教育  
の手引き ロンドン・テートギャラリー編』美術出版社,2012  
堀越啓(著)『論理的美術鑑賞』翔泳社,2020  
堀越啓(著)『論理的美術鑑賞人物×背景×時代でどんな絵画でも  
読み解け』翔泳社,2020  
山本朝彦(著),菅章(著),仲野泰生(著)『美術鑑賞宣言』日本文教  
出版,2003  
ロバート・カミング(著),高階 秀爾(翻訳)『ちょっとみてください……—  
絵画のみかた』メルヘン社,1980  
【作家に関する文献等】  
アンディ・ウォーホル(著)『ウォーホル』(現代美術 第12巻) 講談  
社,1993  
アンドリュウ・ワイエス(著)『ワイエス(現代美術 第3巻)』 講談  
社,1993  
エリック・シェーンズ(著),新関公子(訳)『ダリ』岩波書店,1992  
岡林洋(著・編)『宮島達男 アートワールドを超えて』武田ランダムハ  
ウスジャパン,2007  
カーサ ブルータス編集部(編)『Casa BRUTUS特別編集 アンディ・  
ウォーホルの基礎知識』マガジンハウス,2022  
紀乃公子(著)『アンディ・ウォーホル:モンローと工場とスープ缶』デア  
アフクトリー,1992  
小林頼子(著)『フェルメールの世界 17世紀オランダ風俗画家の軌  
跡』NHK出版,1999  
嶋本昭三(著)『芸術とは、人を驚かせることである』毎日新聞,1994  
ジャニス・ミンク(著)『デュシャン』タツシエン・ジャパン,2001  
千葉市美術館(編)『福田美蘭展(展覧会図録)』千葉市美術  
館,2021  
ポロック(著)『ポロック』(現代美術 第6巻) 講談社,1993  
リチャード・メリマン(著),渡辺真(訳)『アンドリュウ・ワイエス』同朋舎  
出版,1992  
ロスコ(著)『ロスコ』(現代美術 第4巻) 講談社,1993

(2023年9月29日 原稿受理、2024年1月18日 採用決定)